

令和 4 年 4 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00587

研究課題名（和文）ドイツ語におけるモダリティ表現の通時的研究 - 接続法と話法の助動詞を中心に

研究課題名（英文）Diachronic investigations of modality expressions in German: Subjunctive mood and modal verbs

研究代表者

西脇 麻衣子 (Nishiwaki, Maiko)

京都大学・人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：60613867

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではまず、否定表現のある統語環境においてムードがどのように示されているかを中高ドイツ語のテキストを対象に分析し、文否定の3タイプと従属節のムードとの間に相関関係があることを明らかにした。コーパス分析を進める中で、肯定形式でない統語環境に古高ドイツ語の不定代名詞wihtが高い頻度で属格名詞を伴って現れることに気づき、当初の予定を変更して検討した結果、wiht+属格には、主格や対格での表示と対照的に、指示対象の不特定性を際立たせる役割があることが分かった。また、従属節における再帰代名詞の先行詞が主節に明示されている場合、従属節のムードの選択に影響が出るのではないかと考えられることも示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

モダリティは様々な言語において活発に研究されている領域であり、ドイツ語においても個々のモダリティ要素や隣接領域（時制、アスペクト、エビデンシャルリティ等）との関わりについて通時的・共時的な研究が多く行われている。本研究では、モダリティ標識の一つである接続法が現れる統語環境を分析し、古高・中高ドイツ語では、接続法の使用が否定の作用域や再帰代名詞の照応の範囲に関与すること、また、接続法が関係節内で用いられる場合、先行詞の非特定性が表される可能性についても示した。本研究は、接続法とモダリティ以外の文法カテゴリーとの関わりについて考察し、先行研究とは異なる視点からモダリティ研究に寄与したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study began with the examination of subjunctive mood usage in negative syntactic environments in the Middle High German text 'Das Nibelungenlied', and it was ascertained that the three types of sentence negation and the mood selection of the subordinate clause correlate with each other. Thus, when corpus analysis revealed that the Old High German indefinite pronoun 'wiht' frequently occurs with genitive nouns in non-affirmative syntactic situations, the initial research goal was modified to focus on this phenomenon. The data revealed that 'wiht' with genitive nouns shows the non-specificity of the referential object in contrast to nominative or accusative nouns. Moreover, in a subordinate clause that contains a reflexive pronoun, mood can be selected by the reflexive pronoun's antecedent, if it is expressed in the matrix clause.

研究分野：ドイツ語学

キーワード：古高ドイツ語 中高ドイツ語 接続法 従属節 不定代名詞 再帰代名詞

1. 研究開始当初の背景

モダリティは話し手がことがらをどのように捉えているか(文で表現された事態が事実・非事実であるか、可能・必然であるか、また、事態に対する推量や意志・願望など)を表す意味論的カテゴリーであり、その形態的・統語的表現手段は多くの言語に存在するとされている。本研究課題の対象であるドイツ語では、接続法、話法の助動詞、話法の副詞、そして不変化詞(心態詞)がモダリティ表現の主な担い手である。モダリティは様々な言語において活発に研究されている領域である。ドイツ語に関する先行研究では、個々のモダリティ要素については通時的・共時的な研究が多く行われているが(例えば Diwald 1999, Müller & Reis (eds.) 2001, Abraham & Leiss (eds.) 2009 等)しかし、それらの要素間の関係も含めた体系としてのモダリティについてはあまり論じられていないと思われる。例外的には、意味論的な3つの観点(認識、意志、感情)から文法的・語彙的なモダリティ表現を分析した Schönherr (2011)があるが、古高ドイツ語に限定されている。このような研究上の背景から、本研究課題では、モダリティ要素のうち、古高ドイツ語期から一貫して観察することのできる接続法と話法の助動詞を中心に、これらの異なる表現形式がドイツ語史の各々の言語段階においてそれぞれどのようなモダリティを表してきたか、また、それらが機能上どのように互いに連関してきたのかについて、コーパス分析に基づき実証的に考察することを企図した。

2. 研究の目的

本研究課題の目的は、モダリティ表現上の接続法と話法の助動詞の「棲み分け」について歴史的に考察することであった。その際、モダリティが他の文法カテゴリーである時制やアスペクト、エビデンシャリティ(証拠性)否定とどのように関わっているかについても検討することを目指した。また、課題を行う上で、モダリティという概念について再検討することも目的とした。「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、モダリティは「ことがらに対する話し手の態度を表すもの」とであると定義することができるが、一方で、「ことがらが事実ではない、あるいは事実であることが定まっていないということを表すもの」と考える立場もあるからである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、主として用例の調査と二次文献資料の批判的検討に基づき、理論的な考察を進めることであった。その際、独自のコーパス分析に基づく統計的データを十分に考慮しながら論を展開していくことを目指した。また、あくまでドイツ語の通時的研究が目標であったが、ドイツ語と系統的に近い言語との比較や通言語的な観点も積極的に取り入れることを試みた。

4. 研究成果

文の従属関係がどのように表されるかは世界の言語において様々であるが(Nordström 2010: 91)その表現形式は主節が veridical(従属節の内容が事実であることあるいは断定的であること)か否かによって大別することができる(Giannakidou 2016 等)。本研究課題では、この基準に依拠し、まず、non-veridical な文脈の一つである否定の統語環境において、ムード(直接法・接続法)がどのように示されているか、中高ドイツ語の『ニーベルンゲンの歌』を対象に分析を行った。ドイツ語では歴史的に文否定の方法が3種類あり、それらは、定動詞の直前に否定辞 *ne* を置く、*ne* と否定の副詞 *nicht* を併用する、*nicht* のみを用いる、3タイプである。通時的には *ne* から *nicht* を経て *ne* へと変化したが、中高ドイツ語ではいずれのタイプも見られる。

上記のテキストの分析から、従属節に否定が含まれる場合、そのタイプと従属節のムードとの間に相関関係があることが分かった。*ne* のタイプが接続法と多く共起するのに対し(73%)*nicht* のタイプでは直接法であることが非常に多い(86%)。*ne* のタイプでは、形式からムードの区別がつかない場合を除いても、半数以上が直接法である。従属節における *nicht* のタイプは、否定辞であっても従属節の内容を否定する機能はなく、いわば「冗長的否定」として主節の否定表現と並列的に用いられる場合が少ない(Paul 2007: §S 147)。例(1)に見られるように、冗長的否定辞のある従属節では従属接続詞が用いられず、語順も主節のように動詞が第2位であることが分かった。例(2)のように、従属節における *ne* が否定の機能をもつ場合でも同様である。

(1) *und saget ouch mīner swester, daz si niht lāze daz, sine rite zuo zir vriunden*
(Nibelungenlied 733.3-4)

(2) *ez enlebet sō starker niemen, er nemüeze ligen tōt* (Nibelungenlied 1079.2)

否定の文脈において、前後する2つの文の主従関係が、中高ドイツ語では、現代ドイツ語のように従属接続詞及び語順によって表示されるのではなく、冗長的 *ne* や接続法で示されていることが、『ニーベルンゲンの歌』の分析を通じて明らかになった。この結果は、接続法が非現実のことがらを表す機能をもつとする解釈ではうまく説明できない次の古高ドイツ語の例について

示唆を与えることができる。

(3) *ni méid sih, suntar sie óugti, then gotes sún sougti* (Otfrid I.11,38)

従来、文頭の否定辞 *ni* は、動詞 *méid* (直接法) だけでなく、続く 2 つの節の動詞 *óugti, sougti* (いずれも接続法) の非現実性を否定すると解釈されていた (Erdmann 1874: 155)。しかし、接続法というムードによって先行する文との従属関係を表していると考えることが可能である。

ムードは、(3) のような補文節や、(2) のような副詞節において、それらの主節との関係に関与するだけでなく、関係節においてその関係節が修飾する名詞の(非)特定性 (non-)specificity を表すことができる (例えばイタリア語に関して Catasso & Hinterhölzl 2016: 109)。古高ドイツ語でも、例(4)のように、被修飾名詞には定冠詞 *thio* が付き、形の上では定性を表している。一方、関係節内の動詞のムードが接続法で示されている (*gikústi*) ことから、被修飾名詞の指示対象は特定のものではないと解釈し得る。ムードと特定性の相関について量的なデータに基づいた検討が今後の課題である。俯瞰的に言い換えれば、ムードという形式が、冒頭で言及した命題の事実性・断定性と名詞の特定性という意味論的なカテゴリーの表現に関わるといえるが、それらのカテゴリーの共通性について考えていく必要がある。

(4) *Wóla ward thio brústi, thio Kríst io gikústi* (Otfrid I.11,39)

上で述べたように、本研究課題では、まず、否定表現のある統語環境においてムードがどのように使われているかについて検討したが、コーパス分析を進める中で、そのような統語環境に特徴的に現れていると考えられる次の 2 点に気づいた。一つは、不定代名詞 *wiht* (古高ドイツ語)・*iht* (中高ドイツ語) が高い頻度で属格名詞を伴って現れること、もう一つは、従属節における再帰代名詞の先行詞が主節に明示されている場合、従属節のムードの選択に影響が出るのではないかと考えられることである。そこで、当初の予定を一部変更し、この 2 点について調査・分析することとした。

不定代名詞 *wiht/iht* は、否定極性表現として、狭義の肯定形式でない統語環境、すなわち、否定文や疑問文、様々なタイプの従属節に現れることが知られている (Jäger 2007: 142, Braune 2004: § 295, 299)。古高ドイツ語のいくつかのテキストを分析した結果、*wiht* はテキストによって使用頻度が大きく異なっていた。約 150 の用例のある『オトフリートの福音書』では、その半数以上が属格名詞と共に起るが、例(5)に見られるように、*wiht* + 属格 (*gómmanes*) が同一の動詞のもとで対格 (*gómman*) と対照的に使われている。

(5) a. „*lh ni háben*“ *quad siu, „in wár wiht gómmanes sár.*“ (Otfrid II.14,49)
b. *thú ni habes gómman* (Otfrid II.14,51)

古高・中高ドイツ語では、属格は部分格としての役割をもっていた。その場合、属格となる名詞は、部分が全体と質的に同じであるような分割可能な対象を表すが、*wiht* + 属格は、例(5)の *gómman* (「夫」) ように分割不可能な対象に対しても用いられる。

中高ドイツ語でも『ニーベルンゲンの歌』における *iht* の使われ方を分析し、*wiht/iht* + 属格は有標の表現であり、無標の主格 (主語の場合) や対格 (目的語の場合) に対して、指示対象の不特定性を際立たせる役割を担っていると結論づけた。現代ドイツ語では *etwas* (「何か」) に対して *irgendetwas* という強調表現があるが、主格ないし対格の名詞に対する *wiht/iht* + 属格名詞と並行的であるといえる。

上で述べたように、否定の文脈における従属節内のムードについて検討していく中で気づいたもう一つの点は、最小の節の範囲を超えた再帰代名詞の照応に関してであった。例えば(6)のように、再帰代名詞 *sih* を含む節の動詞のムードは接続法であり (*ruartin*)、この節の一つ前の節に再帰代名詞のいわゆる先行詞 *fadum* がある。(下付きの *i* は、その語が同一の対象を指すことを示す。)

(6) *so fadum; zi ändremo scal, / sih; untar in ruartin,* (Otfrid IV.29,41-42)

古高・中高ドイツ語では代名詞主語が省略されることが少なくなく (Paul 2007: § 110)、例(6)でも再帰代名詞を含む節の代名詞主語は明示されていない。特にこのような場合における再帰代名詞の照応を表す手段としてムード (接続法) が使われているのではないかと考えたが、本研究助成期間に定量的に示すことはできなかった。しかし、不定詞句内の再帰代名詞の照応に関しては一定の成果を出すことができた。

定動詞が使役や命令・依頼などを表すとき、古高・中高ドイツ語では、文に埋め込まれた不定詞句内の再帰代名詞が(7a)のように文の主語と照応する場合、また、(7b)のように定動詞の目的語と照応する場合がある。

(7) a. *Bat er; sih; ketrenca daz uup, thaz thara quam.*

現代ドイツ語では、(7a)のようなタイプは非文法的である。文の主語と同じ指示対象が不定詞句内に表されるときは(8)のように人称代名詞が用いられる (Gunkel 2003: 116)。

(8) Karl_i ließ Paul *sich_i / ihn_i rasieren.

では、古高・中高ドイツ語ではなぜ(7a)のようなタイプが可能だったのだろうか。不定詞は非定形の動詞であることから行為や出来事を表すため、文であれば一般的に主語で表されるような動作主が含意され得る。このような含意的動作主は不定詞の意味論上の主語といえるが、(7)、(8)では定動詞の目的語がそれに当たる。(7a)では再帰代名詞 *sih* がこの不定詞の主語 *daz uuip* を飛び越えて、言い換えれば不定詞句という単位の外へ出て文の主語 *er* と照応する。これに対し、(7b)では、不定詞 *meron* の意味論上の主語は *thīu brōt*、目的語は再帰代名詞であるから、再帰代名詞の照応は不定詞句という最小の「文」の中に収まっている。現代ドイツ語の例(8)からは、再帰代名詞の照応関係が不定詞句を超えると人は人称代名詞となることが分かる。不定詞の主語は、古高・中高ドイツ語では含意のままにとどまったが、現代ドイツ語では不定詞句が文に相当するものとして捉えなおされ、主語が前景化した。そのため、不定詞句内の再帰代名詞は最も近い照応先である不定詞の主語を超えて、文の主語と同一の対象を指すことができなくなったと考えられる。

本研究課題の当初の予定では、「2. 研究の目的」で言及したように、接続法と話法の助動詞がモダリティ表現上、歴史的にどのように重なり合い、またどのような役割分担をしてきたかについても検討することを目指していた。しかし、上で述べたように、否定の統語環境におけるムードの使われ方に関して、不定代名詞 *wiht/iht* と、再帰代名詞の節を超えた照応について先に考察を行ったため、研究助成期間には、ムードの体系と話法の助動詞の体系の機能的交叉について検討するまでに及ばなかった。大局的にはムード(特に接続法)の用法の衰退と話法の助動詞によるモダリティ表現の発達との間には相関関係があると思われるが、今後の課題である。

引用文献:

- Abraham, Werner & Elisabeth Leiss (eds.) (2009): *Modalität. Epistemik und Evidentialität bei Modalverb, Adverb, Modalpartikel und Modus*. Tübingen: Stauffenburg.
- Braune, Wilhelm (2004): *Althochdeutsche Grammatik I: Laut- und Formenlehre*. 15. Aufl. Tübingen: Niemeyer.
- Catasso, Nicholas & Roland Hinterhölzl (2016): On the question of subordination or coordination in V2-relatives in German. *Linguistische Berichte* 21, 99-123.
- Diewald, Gabriele (1999): *Die Modalverben im Deutschen. Grammatikalisierung und Polyfunktionalität*. Tübingen: Niemeyer.
- Erdmann, Oskar (1874): *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids. Erster Teil. Die Formationen des Verbuns in einfachen und in zusammengesetzten Sätzen*. Halle: Waisenhaus.
- Giannakidou, Anastasia (2016): Evaluative subjunctive and nonveridicality. In: Joanna Błaszczak et al. (eds.) *Mood, aspect, modality revisited: New answers to old questions*. Chicago / London: The University of Chicago Press, 177-217.
- Gunkel, Lutz (2003): Reflexivierung in Acl-Konstruktionen. In: Lutz Gunkel et al. (eds.) *Arbeiten zur Reflexivierung*. Tübingen: Niemeyer, 115-133.
- Jäger, Agnes (2007): 'No' changes: On the history of German indefinite determiners in the scope of negation. In: Elisabeth Stark et al. (eds.) *Nominal Determination: Typology, context constraints, and historical emergence*. Amsterdam / Philadelphia: Benjamins, 141-170.
- Müller, Reimar & Marga Reis (eds.) (2001): *Modalität und Modalverben im Deutschen*. Hamburg: Buske.
- Nordström, Jackie (2010): *Modality and subordinators*. Amsterdam / Philadelphia: Benjamins.
- Paul, Hermann (2007): *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Aufl. Tübingen: Niemeyer.
- Schönherr, Monika (2011): *Modalität im Diskurs und im Kontext. Studien zur Verwendung von Modalitätsausdrücken im Althochdeutschen*. Frankfurt a.M.: Peter Lang.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Werner Abraham / Maiko Nishiwaki	4. 巻 11 (2)
2. 論文標題 Mood alternation in German: Negation as a specific case of epistemic weakening	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Glottology: International Journal of Theoretical Linguistics	6. 最初と最後の頁 209-261
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1515/glot-2020-2012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Maiko Nishiwaki	4. 巻 無し
2. 論文標題 Zur Funktion des Indefinitpronomens wiht im Althochdeutschen und iht im Mittelhochdeutschen	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 掲載図書: Japanese Gesellschaft fuer Germanistik (Hrsg.) Einheit in der Vielfalt? Germanistik zwischen Divergenz und Konvergenz: Asiatische Germanistentagung 2019 in Sapporo. iudicium	6. 最初と最後の頁 812-819
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Maiko Nishiwaki	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 Reflexivstrategien im Alt- und Mittelhochdeutschen	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 掲載図書: F. Sommer et al. (eds.) Jenseits der Formenlehre. Indogermanische Morphologie mit Grauzonen- und Schnittstellenphaenomenen. [INNSBRUCKER BEITRAEGE ZUR SPRACHWISSENSCHAFT]	6. 最初と最後の頁 総頁数18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Maiko Nishiwaki
2. 発表標題 Reflexivstrategien im Alt- und Mittelhochdeutschen
3. 学会等名 Workshop on Reflexivity (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Maiko Nishiwaki
2. 発表標題 Zur Funktion des Indefinitpronomens wiht im Althochdeutschen und iht im Mittelhochdeutschen
3. 学会等名 Asiatische Germanistentagung (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------